「もののあわれ」と「日本」の発見

９０年代以降、有史以来はじめてといっていい程、日本は先進国として西側にすり寄り、自己同一化している。西側とは、単なる地理的な方角ではなく、価値を含んだ概念だった。「西側が優れている」という世界像は自明であり、そこに自己をどう位置づけるかに悩んできた。

西側の人間関係は、善悪を厳しく区別するだけでなく、合理的解釈を世界に下したと自負している。相手を悪とみなし糾弾し、それを善に導くべきだという態度は、みずからの価値を普遍的価値として他者へ強制することである。それはある種の競争主義にほかならず、また合理的解釈とは、みずからの解釈こそ世界では世界で唯一の正当性をもち、価値を独占すべきということである。

たいする和歌が、「とかくに人の情のありのままをこまかに書く」というとき、本居宣長が主張しているのは、人間の感情には合理では説ききれない陰影や奥深さがあることへの配慮であり、理性の限界を超えた心にまで筆の力は及ぶことへの確信である。大陸から拡張した朱子学（人間を善悪の二項対立で評価する倫理学）の価値基準が日本を飲み込んでいく以前の生き方を、宣長は「もののあわれ」と名づけ、もう一つの関係性を発見している。

宣長がいいたいのは、複雑さに富む人間関係を、道徳的価値観から裁断し、一側面から判断することへの抗いである。さらに問題なのは、この一面的人間像から、政治のあり方を論じるようになるからだ。
人間が合理的に振る舞うことを前提に、その集合体として社会的営みを考えている。だが、人間は政治的役割にのみ所属し、自己像を形成しているわけではない。様々な役割に所属し、その束が自己なのであって画一化とは正反対の生き物なのである。

宣長を含めた男性知識人は、「日本とは何か？」すなわちナショナリズムを問うている。「日本」とは男性的なものにかかわるということである。
一方、抑圧されつづけてきた女性は、ヒロイズムとは無縁の思想、「生き延びるための思想」の持ち主である。
男性が数千年にわたり作り上げてきた思想はすべて、死ぬための思想であった。

言語は他者とのあいだを架橋する作法であり、先祖の営みが堆積した澱のようなものだから、その国の独自の人間関係のあり方を映しだしている。
だから和歌を詠み、源氏物語を学ぶことで、宣長は「歴史」からの脱却をはかったのである。それはある種の自由の希求であり、閉塞感の打破である。明治以降の日本人もまた、西側の定義こそ違え、同じ課題に対応してきたからだ。

源氏物語では、ただただ人間のすることや、心の動きをよく知ることが善であり、その逆が悪しきことなのである。つまり「もののあわれ」を知っているかどうかが、善悪の基準になるのだ。

おそらく宣長最大の功績は、和歌と物語世界が肯定と共感の倫理学を主題とし、恋愛から「日本」という国家が立ち上がっていくことを証明した点にある。

いいかえると、宣長は人間の実存ではなく、「関係」に注目したということだ。恋愛とは個人的であるよりも、男女という一対の関係性で成り立つからである。そして恋愛と国家との関係を論じた思想家は、近代以降でも、柳田国男、吉本隆明や三島由紀夫、さらには大江健三郎などの系譜がある。

日本という国家を考えるためには、女性的なものから考えなければならないと主張したのである。

【本居宣長「もののあわれ」と「日本」の発見】先崎彰容著より一部抜粋